

都市アメニティ計画論

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭

1. まえがき

わが国最初の国土計画である全土が策定されて20年、新都市計画法が公布されて15年が経過した。そして地域計画的視点からも都市計画的視点においても現在人間居住の総合的な環境育成を計画の目標にするようになった。ここに至って、近年欧米の都市計画モデルを「望ましいモデル」としてはなく「個性的なモデル」として相対視し、新鮮な視点からの自己分析を行い自らの特質を発見し、独自の計画技法にもとづいて21世紀への展望を切りひらいていこうという声が開かれるようになってきている。本論はわが国自らの特質にもとづいた都市アメニティ計画確立の手がかりを得るべく、日独都市アメニティの比較考察を通じて独自のアメニティの追求の仕方について述べたものである。

2. 都市アメニティの概念

小川博三は「都市とはある地域の核をなし、あるいは自ら核となって地域を構成する地人に対する相である。」と定義した。ここに地とは環境のことであり人とは人間社会のことである。この定義によれば、独自の計画技法の確立に際してはまず環境（人・物との関係、極言すれば美）と人間社会（人・人との関係、極言すれば愛）の2つの視点から「その特質は何か」を一体的に探る必要があることを教えている。この2つの視点からの都市の認識とは換言すれば都市アメニティからの認識の必要性を述べているにほかならない。したがってここではアメニティを次のように考えるものとした。

都市アメニティ { 都市アメニティ（都市の快適な環境）
都市コミュニティ（都市共同体）

すなわち都市アメニティを広義と狭義の意味で解釈（広義のアメニティはアメニティとコミュニティをいわゆるハードな都市の快適環境とソフトな都市共同体の2つの意味を含むものとし狭義のアメニティは単に物的・快適環境を意味するものとして議論を進める。

3. 日独都市アメニティの比較

日本の都市アメニティの特質を浮きぼりにするための最も有効な方法はわが国の都市と欧米の都市とをこの点から比較考察することである。なかでも近世城下町がわが国の都市造形の典型といわれ、中世北欧の都市がヨーロッパ型都市の原型といわれているので、ここではわが国の城下町起源の都市と北欧中世起源の都市（ドイツ）の都市に注目し、上述の都市アメニティ（都市の快適な環境）と都市コミュニティ（都市共同体）の視点から比較検討した。その特徴的な点をまとめると表-1のように示される。これらの都市の根底に横たわる特性の差異について神谷国弘は風土→社会→都市という図式で、つまり風土の差→農業の態様の差（有畜麦作農業⇔水稲耕作；社会的特質の差）→都市の伝統の差異という図式で比較考察しており興味深い。

表-1に示された都市の特性の差異に注目しながら都市アメニティと都市コミュニティが如何なるタイプの都市環境とどのようにかわってくるかを次に考えてみよう。

4. 都市アメニティ評価分析モデル

ここでは人間居住の総合的環境について次のような視点、すなわち都市アメニティ（都市の快適環境）と都市コミュニティ（都市共同体）の2つの尺度で接近するものとし、1軸を都市アメニティ、もうひとつの軸を都市コミュニティとしてこの2軸を交差させて、都市アメニティ評価分析モデルを描き出した（図-1）。図-1の第1軸においては右に行くにしたがって景観に重点を置き、左に行くにしたがって空間に重点を置く都市環境を意味し、第2軸においては上に行くに従ってコミュニティに重点を置き、下に行くにしたがってプライバシーに重点を置く人間・社会的環境を意味する。

この分析モデルから4つのタイプの都市環境が描かれる。①公園緑地・森林 ②機能的空間 ③歴史的景観 ④パーソナル景観（個人によって類型化、評価の異なる都市景観要素）である。

図-1において、第2・4象限へ空間・景観、主として合理的・論理的に生み出され得るものと考えられるので環境操作上の一側解があるパターンであると考えられ、一方第1・3象限の景観・空間は人恣的操作を越えた性格をもつパターンによって主として占められているものと考えられるので環境操作の上では特異解に基づいて育成されるものであると考えられる。また、図-1は第2象限の機能的空間の育成に際しては都市空間の特質とコミュニティの特質を十分配慮すべきであり、第4象限のパーソナル景観の育成に際しては、その景観の特質とプライバシー（私生活）の関係を十分配慮すべきであり、第1象限の歴史的景観形成に際しては都市景観の特質とコミュニティの特質に対して注目する必要がある。第3象限の公園緑地・森林の育成に際しては、都市空間の特性とプライバシーに着目して推進するべきであることを示している。

これらの4つのタイプの都市環境は、都市の成長発展とともに第3象限の公園緑地・森林に加うるに第2象限の都市機能空間、さらには第1象限の歴史的景観、さらに加うるに第4象限のパーソナル景観というように、第3象限から時計まわりに第4象限まで回転しながら都市環境がもっと適切なそしてより個性的な（国際的にみても）環境へと進展していくものと考えることができよう。

都市アメニティ計画に際して配慮すべきことは、4つのタイプの景観のそれぞれの要素の周辺環境との操作ではなく、また要素相互間の操作でもなく、この4つのタイプの景観の相互のより個性的に整理された関係のデザインに注目することなのである。

渡辺 俊一 比較都市計画研究の視点と方法
小川 博三 国際比較における日本の都市

表-1 日独都市アメニティの比較

都市アメニティ（都市の快適な環境）	
西 独	日 本
○はてしない曠野から截然と区画して市民の生きる空間をつくり内部の構築物により修景している ○都心はほとんど移動しない ○都市が凝集的である ○具象的である ○広場と通りによって構成されている ○河川水が定期的で河川景観に変化かとはしい ○平地林より成っている ○色彩豊かな建築群 ○暗に敏感 ○光に敏感 ○静かな街並み	○町全体が風景の中に溶け込むような条件のところを好ましい都市と意識される ○繁華街は時代によって変わる ○都市が拡散的である ○抽象的である（イメージ保存） ○町（地域）家によって構成されている ○河川水量の変化が激しく河川敷景観が特徴的 ○山地林より成っている ○美しく個性的な個人の庭 ○美に敏感 ○暗さに敏感 ○にぎやかな街並み
都市コミュニティ（都市共同体）	
西 独	日 本
○公私の振幅が大きい（個人→都市） ○集住し移動か原型 ○二元的都市 ○支配的パーソナリティ（キリスト教） ○現実の生活を大切にする	○公私の振幅が小さい（家族→近隣） ○疎定住か原型 ○一元的都市 ○受容的パーソナリティ（仏教） ○故郷を大切に思いつける

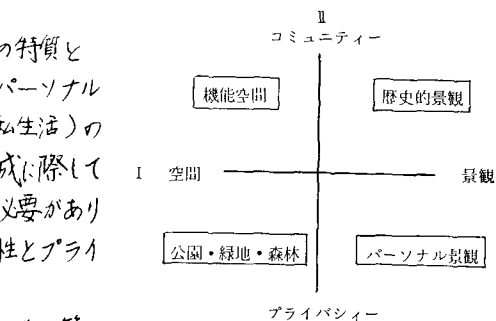


図-1 都市アメニティ評価分析モデル

第3象限から時計まわりに第4象限まで回転しながら都市環境がもっと適切なそしてより個性的な（国際的にみても）環境へと進展していくものと考えることができよう。

都市アメニティ計画に際して配慮すべきことは、4つのタイプの景観のそれぞれの要素の周辺環境との操作ではなく、また要素相互間の操作でもなく、この4つのタイプの景観の相互のより個性的に整理された関係のデザインに注目することなのである。

都市計画 123号 1983
工学会誌 1971